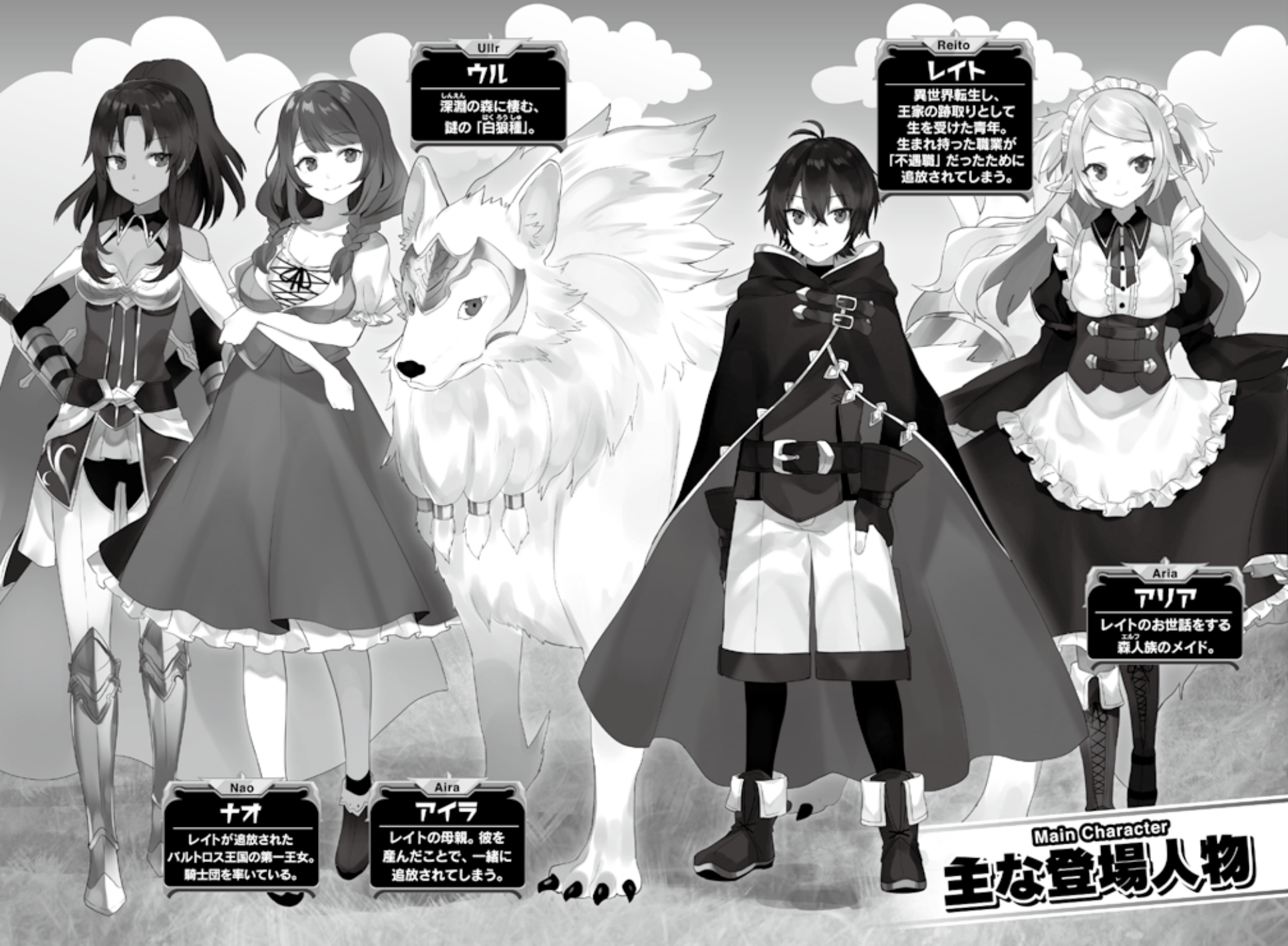


不遇「ふぐうしよく」職とバカに  
実際はそれほど悪くありません？

KATANADUKI  
カタナヅキ



Ulr

ウル

しんま  
深淵の森に棲む、  
びんめし  
謎の「白狼種」。

Reito

レイト

異世界転生し、  
王家の跡取りとして  
生を受けた青年。  
生まれ持った職業が  
「不遇職」だったために  
追放されてしまう。

Aria

アリア

レイトのお世話をする  
エルフ  
森人族のメイド。

Nao

ナオ

レイトが追放された  
バルトロス王国の第一王女。  
騎士団を率いている。

Aira

アイラ

レイトの母親。彼を  
産んだことで、一緒に  
追放されてしまう。

Main Character

主な登場人物



ごく普通の高校生、白崎零斗しろさきれいとは、両親の仕事の都合で学校を転校することになった。

転校初日、彼が通学バスに乗るためにバス停で待っていると、突然、目の前で異変が生じた。

「んっ……？ な、なんだこれ？」

空間そのものがヒビ割れたように、黒い亀裂きれつが走っている。驚いた彼が後退あひずきろうとすると、そのヒビは彼を引き込むようにどんどん広がっていった。

「な、何が起きているんだ……うわっ!? す、吸い込まれるっ!？」

亀裂は零斗を吸引し始め、次第にその力を増していく。あつという間に人ひとりを呑み込むほどに大きくなったヒビに、彼の身体はますます引きずり込まれていった。

「まっずい……!？」

踏ん張って耐えるが、吸い込む力はさらに強くなる。

零斗は助けを求めてあちこちを見回すものの、周囲に人はいない。ついに、彼の片方の手がヒビの中に引き込まれてしまう。

「く、くそ!？」

手足をばたつかせて必死に手を抜こうとする零斗。しかしそんな抵抗も空しく、彼の身体はヒビの中に完全に取り込まれてしまった。

「うわあああああっー!?!」

零斗の悲鳴がバス停に響き渡る。謎のヒビ割れは彼を完全に吸い込むと、あっという間に消失してしまった。

いつもの光景に戻ったバス停。

そこに残されていたのは、零斗が持っていた学生鞆だけだった。

## 1

「……ここはいつたい……?」

気が付くと、零斗は白一色の空間にいた。

周囲を確認するが……地面がない。零斗の身体は、無重力空間にいるかのごとく浮いている。

「じ、地面が……!?! いや、冷静にならないと……」

パニックになりそうになったものの、零斗は頭を振って気持ちを落ち着かせる。

ひとまず彼は、自分がバス停からここまでどうやって移動したのか、思い出してみることにした。

だが、しばらく頑張ってみても思い出せない。どうやら謎のヒビ割れに吸い込まれた際に、意識を失っていたらしい。

そうこうするうちに、突然彼の目の前に、一人の女性が現れた。

やや幼さを残した顔立ちで、柔らかく微笑むその美しい女性は人間のように見えるが、いくつかが奇妙な点があった。

髪は銀色に光っており、背中のように翼が見える。髪だけでなく、全身も光り輝いていた。

(人間……いや、天使様とか?)

零斗がそう思ったとき、女性は笑みを深めてゆっくりと口を開く。

『いや、驚きましたね。数百年ぶりに、人間の、しかもこんなに若い方が訪れてくるなんて。びっくりです』

混乱する零斗に対し、女性の口調はどこかおんびりしていた。

零斗はしばらくポカンとしてしまったが、慌てて言う。

「えっ……だ、誰だお前は!?!」

『あ、どうも。まずは初めまして、と言うべきですかね』

女性はそう告げると、丁寧にお辞儀をした。面食らってしまった零斗だったが、なんとか冷静になろうとし、口調を改めて恐る恐る話しかける。

「……あの、ここはどこなんですか?」

『狭間の空間です。世界と世界の間に存在する場所ですよ』

女性の言った意味がよく分からず、首を傾げる零斗。女性は彼が理解していないのを察したのか、説明を付け加える。

『より正確に言えば、ここはあなたのいた世界と別の世界を繋ぐ場所。星と星の間に存在する宇宙空間のようなところですよ。あなたは自分がいた世界から弾き出されて、この場所にたどり着いたんですよ。あ、ちなみに、もう元の世界に戻ることはできません』

「なんで!？」

説明を呑み込めないながらも、零斗は反射的に大声で反応してしまった。そんな零斗に対して、女性は淡々と答える。

『戻ることができない理由は、全ての世界が縦に連なっているからです』

「縦って言っても……地球の上は宇宙じゃないの？」

零斗の知っている限り、地球を取り巻く環境はそういうものだった。しかし、女性は零斗の知らない世界の摂理を、さも当然のように説明し始める。

『縦というのは位相のずれの話です。あなたの世界のものに例えるなら高層ビルでしょうか。あなたがいた世界は、建物の階層の一つ。先ほどヒビに吸い込まれてしまったあなたは、要するに間違つて下の階層に繋がる落とし穴に落ちてしまったわけです。ただし、ビルと違うところがあります。それは階段や梯子が存在しないこと。つまり上の階層に戻る手段がないんですね。ちなみに、

今のあなたは落とし穴に落ちている最中。ビルの階層の間、あなたがいた世界から別の世界へと繋がる空間に滞在していることになります』

「はいっ!？」

話を聞きながら零斗は激しく動揺した。やはり、彼女の言っている意味がまったく分からない。

女性は淡々と続ける。

『私は狭間の世界を管理する存在。私の役割は、この狭間の世界に落ちてきた、あなたのような方を別の世界に送り込むことです』

女性にじつと見つめられ、零斗は息を呑んで口を開いた。

「……役割？ あなたはもしかして、神様じゃ——」

すると、女性は零斗の言葉を遮って告げる。

『あ、私はただの管理者ですよ。神様なんて、そんな大それた存在じゃないです。まあ、管理すると言っても基本的には暇だから、普段はここから上と下の世界を覗き込んでいるだけ……コホン、私の話はこれぐらいにしましょうか。そろそろあなたを、別の世界に送らないといけませんね』

「ちょ、ちょっと待ってください!! 本当に元の世界には戻れないんですか？」

諦めきれず零斗はそう尋ねてみたが、女性の返答は軽く、非情なものだった。

『無理ですね。まあ、災難だとは思いますが、不慮の事故に遭ったと考えてください。次の世界でも頑張ってくださいねっ』

「ええっ……」

落胆した零斗は、元の世界にいた家族や友人のことを思い浮かべる。

(皆にお別れの言葉を言うこともできずに、俺はよく分からない別の世界に送られるのか……)

謎の異世界に送られる……改めてそう考えてみた零斗は、突然不安に襲われ、慌てて女性に尋ねた。

「あのっ!! 別の世界というのはどういう場所なんですか?」

『おっ、覚悟を決めましたか。そうですね、別に教えても特に問題なさそうですし……』

女性は嬉しそうな笑顔を見せると、一瞬考えるような仕草をしてから口を開く。

『うーん、超絶的に分かりやすく言えば、ファンタジー世界ということになります。RPGゲームはお好きですか? こちらの世界では、本物の魔物、それにエルフやドワーフといった種族も存在しますよ』

「ファンタジー……」

『さらに、あなたが住んでいた世界とはずいぶん変わった路線で進化しています。科学の代わりに魔法が発展しているんです』

「魔法って……あの?」

零斗が尋ねると、女性はにっこりとうなずく。

『こんな感じに魔法が扱えます。とりゃ〜』

女性はそう言って、何も無い空間から杖を取り出した。そして、杖の先端から火や氷の塊かたまりを次々と出現させていく。

零斗が目の前まへの光景に呆気あおけに取られていると、女性は指を鳴らして火と氷の塊を消した。零斗は呆然ぼうぜんとしながら声を搾しぼり出す。

「な、今のが魔法?」

『そういうことです。あ、そういうえば、一つ伝え忘れていたことがあります。あっちの世界に移動するときには、あなたの身体は元の世界の記憶以外、全て作り変えられます。そのままだと色々不都合が起きますから』

「作り変えるって」

『世界そのものが違うから重力が異なりますし、科学の世界で生きてきた人間が魔法を扱えるはずないですしね。だから作り変えるしかないんですよ。小説みたいに、普通の人間が都合良く魔法を覚えられるなんて、ありえませんか』

「……ちよつと! じゃあ今の俺はどうなるんですか!?!」

取り乱したように聞いただす零斗。女性は困ったように言う。

『まあ、記憶と意識だけは残しますよ。ある程度ランダムなので、もしかしたら人間じゃない生物に転生する可能性もありますけど……運に身を任せるしかありません』

「この場所に入り込んだ時点で、とんでもない不運なんですけど!!」

零斗は声を荒らげて抗議するが、女性は再び笑みを浮かべる。

『いやいや、逆に考えてくださいよ？ 普通の人間がこの狭間の世界を訪れるなんて、本当に数百年ぶりなんです。むしろすごい幸運……いや、悪運だったのかもしれませんが』

「そんな馬鹿な……」

零斗がため息を吐き出すと、女性が慰めるように言う。

『まあまあ、久しぶりの人間のお客さんですし、私も少しはアドバイスをしますから。そうだし！ 何か知りたいことがあったら、心の中で私の名前を呼んでください。そうすれば、私と会話ができるようにしておきます。私は異世界に関する全ての情報を把握しているので、なんでも聞いてくださいね……』

なぜか急に、零斗の意識が薄れていく。

「なんでも聞いていいなら……あなたの名前は？」

朦朧としながら尋ねると、女性はにっこりと微笑んだ。

『アイリス……狭間の世界の管理者です。困ったことが起きたら、遠慮なく私に「交信」してくださいね。基本的に暇なので、いつでも応えられますよ』

「……約束ですよ」

零斗はアイリスと名乗る女性にそう言い残すと、そのまま意識が途絶えてしまうのだった。

## 2

見知らぬ男女の言い争う声が聞こえてきて、零斗は意識を取り戻した。

「———どういことだ。どうしてこうなった!!」

「お、落ち着いて、あなた……」

「うるさい!! やつと男児が生まれたと思つたら……なんなんだこの屑は!!」

「いや!! やめてっ!! その子はあなたの子供なのよ!？」

様子をうかがおうと零斗が臉を開くと、中世の貴族のような格好をした男性が目に入った。

それと同時に、自分がその男性に抱き上げられていることに気付く。男性は零斗の顔を見て、憎々しい表情を浮かべた。

「こんな屑——」

男性はそう声を荒らげると、側にいた美しい女性に向かって零斗の身体を放り投げた。

(嘘お!?)

投げ飛ばされた零斗は女性に軽々と受け止められる。

ようやくここで、彼は自身に起きている異変に気付く。どうやら零斗の身体は、小さくなっていったらしい。

(身体が縮んだ……？ いや、もしかして……赤ん坊になったのか？)

零斗が自分の身に起きた状況を把握している間、二人の男女はずっと言い争っていた。女性が男性を非難するように声を上げる。

「ああっ……なんてことするの！ 乱暴なっ!!」

「うるさい!! お前のような女に期待したのが間違いだっただ。出ていけ!! ここから出ていけっ!! その呪<sup>のろ</sup>われた赤子を連れて即刻立ち去れっ!!」

「……分かりました」

零斗を受け止めた女性は涙を流し、そのまま扉に向かう。そして扉に手をかけ、振り返る。

「さようなら。あなたのことは愛していたわ」

「……頼む、もう消えてくれ!!」

男性は背を向けたまま、女性を怒鳴りつけた。

女性は赤子の零斗を抱え、涙を流しながら部屋をあとにする。

零斗は、目の前で練り広げられた二人のやり取りから、この女性が自分の母親であり、さっきの男性が父親であるということはなんとか理解した。

いきなり波乱に見舞われたが、この先の自分の人生がさらなる困難に満ちたものになるとは、このときの彼は知る由もなかったのだった。



「ううっ、どうしてこんなことに。この子は何も悪くないのにっ」

赤ん坊の零斗を抱いた母親は部屋の外で泣き崩れていた。

しばらくして、彼女の前に複数の人間が現れる。

零斗は彼等の格好を見てぎょっとしてしまった。いずれも中世の兵士のような鎧と武器を身に着けていたのである。

(なんだこの人達……コスプレ？ いや、どう見ても作り物とは思えない。まさか、本物の兵士なのか?)

兵士らしき男性の一人が母親に話しかける。

「奥様、落ち着いてください。申し訳ないのですが、あなたとその赤子がこれ以上城に滞在するとは許されません。我々が城の外まで案内します」

零斗は、改めて男性達の着込んでいる鎧に目を向ける。

(レプリカなんかじゃない。本物の兵士と見て間違いなさそうだな)

ここで零斗は、アイリスに言われていた通り、自分が異世界に転生してしまったことを改めて実感した。

それはともかく、どうして自分の母親と思われるこの女性が泣いているのか、そして父親だと思



われる男性が赤ん坊の自分に対して激しく怒っていたのか分からず、混乱したままだった。そんな彼に気付くことなく、大人達はどんどん会話を進めていく。

兵士の男性が母親に告げる。

「参りましょう。既に飛行船は用意しています。今なら他の人間に気付かれないうちに移動できるはずですよ」

「私達をどこに連れていく気ですか！」

兵士は押し黙り、そして言いにくそうに口を開く。

「……申し訳ありませんが、その質問には答えられません」

「そうですか……分かりました。抵抗はしませんから、どうかこの子にだけは危害を加えないでください」

母親がそう言うと、兵士の一人が大きな声を出す。

「危害なんて……馬鹿なことを言わないでください!! 我々は王国に忠義を誓っております!! 王の妻であるあなたは我々の主人の一人なのです。そんな悲しいことを言わないでください……」

「王の妻である私には……ですか。ならばこの子にも忠義を誓えませんか？」

母親は静かに零斗へ目を向ける。

兵士は唇を噛みしめ、目の前の母親から視線を逸らして言う。

「……申し訳ありませんが、その赤子に関しては……残念ですがその赤子には、王族としての資格

は……」

「王族の資格がないと？ この子は私の子よ!! 夫と……国王と私の息子なのよ」

兵士の言葉を遮るように母親が声を荒らげると、兵士は非情にも告げる。

「その国王様が直々にそう言ったのです。いえ、それ以前に、自分には息子など存在しないとまで……」

「そんな……」

母親は膝から崩れ落ちる。

「奥方様……参りましょう」

「触らないでっ!! 自分で歩けます!!」

兵士が出した手を、母親は強く振り払う。

手を弾かれた兵士は、彼女の意思を尊重するように頭を下げた。そのとき零斗は両手を伸ばし、母親を落ち着かせるように身体を掴んだ。

「あうっ……」

母親は表情を緩め、零斗に告げる。

「あっ、ごめんなさい、あなたは眠っていていいのよ。お母さんが大きな声を出したから起きちゃったのね。ごめんなさい……本当にごめんなさい」

母親は彼を連れて、兵士達とともにその場をあとにした。

そこで零斗は、抗いがたい睡魔すいまに襲われて眠ってしまうのだった。

それからどのくらい経っただろうか。

零斗が目覚ますと、彼は外にいるようだった。ふと顔を上に向けたところ、彼を抱く母親の顔が目に入る。

意識を失う前は落ち込んでいたはずの彼女は、何かを決意したような強い意志をその瞳に宿し、まっすぐ前を見ていた。

つられて零斗も彼女の視線の先を追うと、大きな屋敷が見える。

「あ、あうっ……」

「あら……起こしちゃったのかしら？ ほら、今日からここが私とあなたの家よ」

「うう〜？」

屋敷は年季を感じさせるものの、立派な外観だった。

零斗は今、その屋敷の広大な敷地内にいるらしい。遠くのほうを見ると、敷地の周囲に人の背丈を超える高い鉄柵が設けられているのが分かった。

母親は零斗を抱きかかえながら歩きだし、屋敷の扉を開ける。

中では、大勢の人が二人を待ち構えていたように立っていた。彼等はこの屋敷の使用人らしく、年齢は30〜40代ほど。一番若い人間でも30代前半といったところだ。使用人になる前は兵士だった

と思われるような、立派な体格をした男性もいた。

零斗は使用人が並ぶ光景に圧倒されていたが、それは母親も同じだったらしい。母親は戸惑いの表情を浮かべて話しかける。

「あの、あなた達は？」

使用人の代表と思われる白髪交じりの男性が一步進み出て、深々とお辞儀をする。

「お待ちしておりました、奥方様。我々はこの屋敷の管理を任されている者です。国王様の指示により、あなた様のために仕つかえることを誓います」

「あの人が？ この子のことは聞いているの？」

母親が零斗の身を案じて表情を曇くもらせる。すると白髪交じりの男性は、優しげな表情を浮かべて告げた。

「存じております。我々の中には赤子様と同じ境遇の人間も多数存在します。ですから、ご安心ください。そのお方を慮しける者など、この場にはいません」

「……そう、それなら安心です」

母親はそう言つて安堵あんどの息を吐いたが、零斗は使用人の言葉に引っかかりを覚えていた。

(俺と同じ境遇の人間？ どういうことだろう)

白髪交じりの男性が母親に言う。

「こちらへどうぞ。お坊ぼつちゃまのために子供部屋を用意しております」



「子供部屋？ そんなものまでこの屋敷に？ いいわ、案内してちょうだい」  
「かしこまりました」

母親は零斗を抱いて、子供部屋に向かった。そして中に入り、零斗をゆりかごのベッドに下ろすと、零斗はそのまますぐに眠ってしまった。

こうして零斗の異世界転生一日目は終わったのだった。

零斗が目を覚ますと、またもや母親の姿が目に入る。

「あっ……う〜!?」

「あらあら、もう起きちゃったのかしら？」

母親が零斗を優しく抱き上げる。

零斗は「おはよう」と口にしようとして――

「うー！ うー！」

上手く言えなかった。

それで零斗は、自分が生まれて間もない赤ん坊であることを思い出した。彼は言葉を発する代わりに身体を動かしてみたのだが、母親はただじゃれているだけと思っただけ。

「よしよし、いい子でちゅね〜」

「う〜」

「あらあら、ちょっとご機嫌斜めかしら？」

零斗が不満そうな表情で母親の顔を見上げると、彼女は笑みを浮かべ、零斗をベッドに戻した。そして、嬉しそうに零斗の頬をつつく。

「あう、う〜」

「ふふっ、今日はすごく元気なのね。昨日までは顔色が悪かったから心配してたけど……」  
そこで母親はふと思い出したように言う。

「そういえば、あなたの名前を考えないとね。そうね……レナなんてどうかしら？ 女の子みたいで可愛らしいし！」

「や〜……!!」

零斗が精一杯の抗議の声を出すと、母親は戸惑ったように首を傾げる。

「あ、あら？ 気に入らなかつたのかしら。それじゃあ、レノ、レア、レイ……」

母親は偶然にも、彼の転生前の本名である「零斗」に近い名前を挙げてくれた。零斗は同意を示すために大声を出す。

「あうっ!!」

「え？ レイ？ レイがいいの？」

分かってくれた……が、あともう少しだ。そう思った零斗は、レイではなくレイトにしてもらうべくさらに頑張る。

「と、とおっ……!!」

それらしい発音になったものの、母親は眉をひそめたままだ。

(伝わらなかつたか……)

零斗が諦めかけた瞬間――

「レイ……ト？ レイトが良いのかしら」

「あうっ!!」

「気に入ったみたいね。ほ〜らレイト、まだお昼寝の時間よ。もう少し寝ていてね〜」

母親は零斗の額に口づけし、その場を立ち去っていった。

零斗は誰もいなくなった子供部屋で思索する。

(ひとまず名前はなんとかあったか。無事に異世界に転生したみたいだけど、色々と分からないことだらけだな)

ここでふと思いつく。

(……そういえば、アイリスって人に聞きたいことがあったらなんでも聞けって言われてたっけ)

さっそく心の中で「アイリス」と呟いてみると、零斗の身に異変が生じた。

視界が灰色に染まり、身体がまったく動かなくなったのである。いや、それだけではない。身体  
の感覚そのものが消えてしまった。

『なんだこれ!？』

零斗は声を上げようとしたが、肉体の感覚がないので口を動かさない。しかしその代わりに、思っていたことが頭の中で自分の声となって響いていた。

「いったい何が起きているのか分からず、パニックに陥ってしまう零斗。」

『もしも〜し、聞こえますか？ 無事に人間の赤ちゃんへ転生できたみたいですね〜』

突如として狭間の世界で聞いたアイリスの声が脳内に響き渡った。

『うわあっ!? いったいどうなってるんだ!?』

アイリスの声はさらに続く。

『安心してください。今は、私と零斗さんが交信している状態なんです。時間を停止させているから口は動かさせませんが、代わりに心の声で会話できるようにしているんですよ。時が止まっているので、どれだけ話し込んでも問題ありません』

驚きつつも、零斗はアイリスから言われたことを冷静に受け止める。

『……神様みたいな能力を持つてるんだね』

『別に時間停止くらいなら、この世界の人間でも扱える人はいますよ……三人くらい?』

『とんでもない世界だな……』

よく分からないことだらけだが、ひとまず零斗は、今の自分が置かれている状況を把握するためにさっそく質問することにした。

『ここはどこ?』

『ここは、人族……あ、零斗さんの世界にいるような普通の人間のことですね。その人族が暮らす国家のとある領地に存在する屋敷。その中に、零斗さんはいるんですよ。零斗さんは王族のお子さんとして生まれたんですよ』

『王族って……』

零斗は、憎々しげに睨んできた男の顔を思い浮かべる。

するとアイリスは、零斗の考えたイメージから彼の疑問が分かったのか、すぐに答えてくれる。

『まあ、複雑な環境の子供として生まれたようですね。零斗さんが王である父親に疎まれ、王城から追い出されたのは間違いありません』

分かっていったことだが、少しだけショックを受ける零斗。

気持ちを切り替えて、次の質問をする。

『これから俺はどうなるの?』

『……さあ、分かりません。零斗さんに関わることは私も把握できないんですよ』

『え? ちょっと待って。最初に会ったとき、この世界に関することは全て把握してるって……』

『すみません、説明不足でしたね。この世界に関する物事は、過去から未来まで全て把握できるというのは本当なんです。けれど、零斗さんは元々別の世界の人間ですから、私の能力でも零斗さんの未来に関わることは分からないですよ』

『ええっ!?』

アイリスの適当さに、零斗は軽く呆れてしまう。だが、あまりにもいろんなことが起きているので、深刻に捉えないことにした。

『ま、まあいいや……そもそも未来なんて誰にも分からないものなんだし。あ、そういえば、どうして俺はこっちの世界の言葉が分かるの?』

『あ、その点も説明しておきますね。どうしてかというところ、「翻訳」というスキルのおかげなんです。試しにステータスと唱えてくれませんか?』

『ステータス?』

零斗が「ステータス」という単語を頭の中で考えた瞬間、彼の目の前に液晶画面のようなものが表示された。

『なんだこれ。テレビゲームのコマンドみたいなのが現れたけど』

『それはステータスと呼ばれる魔法です。この世界の人間なら誰もが扱える魔法ですよ。その画面で現在の状態を確認できます』

『これが魔法? 赤ん坊でも扱えるのか……ばぶう』

『なんで今更、赤ん坊みたいな声を出したんですか!?』

零斗は少しだけワクワクしながら、自分のステータスを確認してみた。

### 【名前】レイト・バルトロス

【主職】支援魔術師しえんまじゅうし

【副職】錬金術師れんきんじゅつし

【状態】普通

### 【技能スキル】

翻訳——あらゆる人種の言語、文字を理解できる

【戦技】

なし

### 【固有スキル】

なし

アイリスの声が零斗の頭に響く。

『うんうん、バグもなくちゃんと表示されていますね。あなたはもう白崎零斗ではなく、レイト・バルトロスなんですよ』

あまりにも強引な話なのに、ステータスを見たせいなのだろうか、零斗は不思議とその決心がで

きていた。

『そうだね。俺はこれからレイトとして生きていくよ』

零斗改めレイトは、もう一度ステータス画面を見てみた。

スキルの項目は、そのほとんどが「なし」になっている。

ただし技能スキルの欄には、先ほどアイリスが説明してくれたように「翻訳」が記載されていた。

『この翻訳というスキルがあるから、お母さんとか、他の人の言葉が分かるってこと？』

『そうです。なので、こっちの世界では文字の読み書きの勉強をする必要はありませんよ。良かったですね』

『なるほど。言葉の勉強がいらないのはいいんだけど……赤ん坊の状態ということは、もしかしてこれから食事やトイレは……？』

なんとなく予想できていたことだが、レイトはアイリスに聞いてみることにした。

『もちろん、お母さんか乳母に世話してもらうしかありませんよ。赤ん坊なだから、自分で処理できるところがないでしょ？』

『きゃああっ!! ……あ、ばぶうううっ!!』

『なんで途中で赤ん坊の泣き声に切り替えたんですかっ』

レイトはアイリスに抗議する。

『赤ん坊の見た目になっちゃったけど本当は15歳なんだぞ！ 今更他人にトイレのお世話をしても

らうなんて、苦行だよ……』

『まあまあ、仕方ないじゃないですか。レイトさんは普通の赤ん坊とは違いますから、きつと一年くらいの辛抱ですって』

『くっ……殺せよおっ』

『いつからオークに捕まった女騎士になったんですか。折角生まれ変わったんですから、第二の人生を存分に楽しんでください』

『やだあっ!! なんでオムツの世話になんかならないといけないんだあっ!!』

『なんか本当に幼児退行してませんか?! ……こほん』

アイリスが急に咳払いをした。

そして、ちよつと間を置いてから告げる。

『そんなに嫌なら、早く自立すればいいじゃないですか。この世界のスキルの中には、汚物を処理できる魔法もありますよ。本当は状態異常を回復させる魔法なんですけど……』

『え?』

『あ、でもレイトさんの項目……やっぱり、そういうことでしたか』

『……?』

アイリスが何か言い淀んだので、彼は再び自分のステータス画面を確認してみた。翻訳のスキル以外になんの能力も所持していない。分かったことと言えばその程度だった。

レイトはステータス画面の詳しい見方が分からなかったので、アイリスに説明を求めることにした。

『スキルというのはどういう意味？ 色々種類があるみたいだけど……』

『そういえばちゃんと説明していませんでしたね——』

アイリスがしてくれた説明は次のようなものだった。

スキルは大きく分けて「技能スキル」「戦技」「固有スキル」の三つに分類され、それぞれ効果と役割が異なっている。

まず「技能スキル」とは最も数と種類が豊富なスキルであり、簡単に言えば才能のようなもの。たとえば狙撃のスキルを身に付けると、弓矢や銃を使用する際、標的に命中させやすくなる。しかし、あくまでも才能なので、自分自身で能力を生かせなければスキルを覚えても意味はない。

次に「戦技」とは、RPGゲームでお馴染みの魔法や技のことで、戦闘に役立つスキルの総称である。例えば職業が剣士だった場合は戦技として剣技を覚え、魔術師系の職業だった場合は戦技として魔法を扱えるようになる。ただし、戦技は使用ごとに体力や魔力を消耗するため、多用しすぎると肉体に大きな負荷がかかる。

最後の「固有スキル」は常時発動中となるスキルだ。アイリスによると、自分の意思でオンオフの切り替えを行うことが可能なものも存在しているらしい。

アイリスは一通り説明し終えると、レイトに確認する。

『——という感じですね。どうです？ 分かりました？』

『うーん、なんとか。また分からないことがあったら聞くかも』

スキルはほとんど取得していないので、分からないことが多いのは仕方ない。そう考えたレイトは、自分の境遇について聞いてみることにした。

『なんで俺が追い出されたか知りたいんだけど』

すると、アイリスの声音が少し低くなる。

『やっぱり聞きたいですか？ まあ、そうですね。生まれた途端に呪われているなんて言われて、気にしないはずがありませんよね……』

『理由は知ってるの？』

『ええ、最初に言った通り、私は基本的にこの世界の全てを知っていますから』

アイリスはそう言うと、一気に告げる。

『レイトさんが追い出されたのは、あなたの職業に関係しているんです』

レイトは、改めて自分の職業欄を確認してみた。

そこには、主職、副職として二つの職業が記されている。

『この支援魔術師と錬金術師ってやつ？』

『そうです。職業に触れる前に、順を追っていきましょうか』

そうしてアイリスは、レイトの複雑な家庭環境について説明し始めた。



『レイトさんの父親は、現在あなたのいるバルトロス王国の王様、十三代目のバルトロス国王です。元々は、レイトさんの父親のお兄さんが国を治めていましたが、病で亡くなったため、レイトさんの父親が継いだんです。お兄さんには三人の娘がいますが、この王国では男性が国を統治する法律が存在しているためです。既に前王の奥方が他界していたこともあり、三人の娘はレイトさんの父親に引き取られました』

『バルトロス国王……王国の名前と一緒になんだね』

『はい。王国の決まりで、王位を継いだ者は国の名前であるバルトロスを名乗るようになります。だから、バルトロスとは王族の苗字というだけではなく、王そのものを表すようになるんです』

アイリスは少し間を置くと、この話の本題に入っていた。

『それはさておき、王家は男児を生み出さない限り、その代で終わりを迎えてしまいます。だから、レイトさんが生まれたとき、国王は非常に歓喜していました。ですが、レイトさんの職業が問題だったんです』

『問題っていうと……ものすごく強くて危ない職業とか？』

アイリスの言おうとしていることが分からず、レイトが疑問を口にする、アイリスは悲しげに言った。

『いえ、逆なんです。この世界では「支援魔術師」と「錬金術師」はどちらも不遇職として扱われています』

『え、弱いのか？』

アイリスは一瞬口ごもり、しばらくして告げた。

『……この二つの職業が覚える能力は特殊で、扱える人間が全然存在しません。さらに他の職業と比べて、成長率や能力の上昇率が悪いんです』

シヨックを受けるレイトに、アイリスはさらに続ける。

『どちらの職業も戦闘向けの能力をほとんど覚えなから、自力で魔物を倒せません。かといってパーティを組んでも、全然レベルが上がらないのでお荷物になるだけ。でも、弱いというよりは、大器晩成型の職業なんです。諦めないで地道にレベルを上げてスキルの能力を高めれば、立派に活躍できるんですけど……誰もそこまでには至らないんです』

『いくら職業が不遇だからって、国王の直系で王位継承権を持つ俺を追放するのはおかしくない？』

レイトが非難するように言うと、アイリスが冷静に答える。

『こちらの世界では、それだけ職業というのは大事なものです。不遇職というだけで馬鹿にされ、貶められることが常識となっている世界で、レイトさんが国王になったら、民衆はどう思うと思います？ 暴動を起こして、国家は転覆されてしまうでしょう』

『そんな……』

『悲しいですけどこれが現実です。この世界では不遇職は人間扱いされません。むしろ、レイトさ

んは運が良いほうなんです。殺されずに追い出されるだけで済んだんですから……』

アイリスの話聞き終えて、レイトは黙り込んでしまった。

やがて彼は、決意したように話し始める。

『でも、実の父親から忌み嫌われた理由が分かって良かったよ。過ぎたことを気にするより、これからのことを考えなくちゃ』

『その意気です』

アイリスの激励を受けて、レイトは彼女に尋ねる。

『不遇職は人間扱いされないって言ってたけど、このまま俺が何も対策をせずに生きていけると思う？』

『無理でしょうね。父親の気が変わって、レイトさんを殺そうとしてくるかもしれません。あるいは、王位継承権を巡って別の何者かがレイトさんの命を狙ってくる可能性もあるでしょう。そうではなくとも、危険なこの世界では力を身に付けなければ生き抜けません』

『……なんて世界だ』

『気持ちばかりですが、私からは頑張ってくださいねとしか言いようがありません。もう転生を果たしたレイトさんに私ができることは、こんなふうに話し相手になるくらいしかないのです』  
申し訳なさそうに言うアイリスに、レイトは告げる。

『いや……十分だよ。アイリスにはこれくらいっぱい助けてもらおうと思う』

レイトは、アイリスがこの世界の全てを知っていると知っていることを思い出した。そして、先ほどからずっと気になっていたことを尋ねる。

『アイリス……一つだけ教えてほしい。君はさつき、支援魔術師と錬金術師は大器晩成型の職業だつて言ってたよね。それは本当？』

『……はい、この世界の人間は勝手に不遇職だと思っ込んでいますが、この二つの職業の能力は、実は素晴らしいものなんです。適切な鍛錬をして戦闘方法を工夫すれば、単独で強力な魔物とも戦えるほどに成長します』

『だったら教えてくれ。俺はこれからどうすればいい？』

『いい質問ですね。その言葉を待っていましたよ』

レイトは、見えないはずのアイリスが笑ったように思えた。

意気込んだのは良いが、現実のレイトは赤ん坊であり、できることは限られている。彼はゆりかごの中に収まる小さな自分を自覚しながら、アイリスに再び同じ質問をする。

『それで、俺はどうすればいい？』

『そうですね……まずは技能スキルを色々と身に付けていきましょう。赤ん坊の状態でもスキルを覚えることはできますから、私の指示通りにやってみてください』

レイトが心の中でうなずくと、さっそくアイリスが告げる。

『レイトさんの周囲で見える物を教えてください』

彼女の言葉に従い、レイトはゆりかごから見える範囲の景色を確かめる。時間が停止しているの  
で身体は動かせないが、前方の様子くらいは見えた。

レイトは見たままを伝えていく。

『……天井があつて……あと、窓が開いているのが見える。他には……蝶ちようが飛んでいる』

蝶は羽を広げた状態で空間に固定されていた。

『ちょうど良いですね。この状態なら時間が停止しているので動くことはありませんし、蝶を観察  
してください』

『観察？ どういうこと？』

『いいから黙って見続けてください。細かいことに気付いたらできるだけ思い浮かべてくださ  
いね』

『うん……』

アイリスの言葉に戸惑いながらも、レイトは彼女を信じて上空に浮かんでいる蝶を観察し続ける。  
そして蝶の特徴を挙げていった。

『羽や胸が黒く染まっている。だけど瞳だけが青く光ってる。それと、よく見たら羽の模様が薄い  
黒と濃い黒の縞しまになっている。あとは——』

そうやって目についた物を考え続けていると、突然、視界にステータス画面が表示された。

#### 〈技能スキル「観察眼かんさつがん」を習得しました〉

画面を確認した彼は、即座にステータスの魔法を唱えてみた。

すると別の画面が現れ、習得したスキルの詳細な情報が表示される。

#### 観察眼——観察能力を限界まで高める

『単純な説明文だな……』

試しにもう一度、蝶に視線を向ける。

先ほどまでは気付かなかった細かい特徴まで把握できた。

『あの蝶、左右の羽で鱗粉りんぷんの成分が違うのか。アイリス、観察眼というスキルを身に付けられたみ  
たいだけ……』

『それは良かったですね。初のスキル習得、おめでとうございます。効果は実感できましたか？』

『うん、普通じゃ絶対気付かないようなことまで分かるようになってる』

レイトは、蝶の観察をしたただけであっさりスキルを身に付けられたことに驚いていた。そして、  
この世界でのスキルの習得方法について見当を付ける。

『もしかして、観察眼のスキルは、俺が観察を続けていたから覚えられたの？』

『その通りです。ちなみに、商人と呼ばれる職業だったら、観察眼の上位互換である鑑定のスキルを覚えられます。こちらのほうが便利ですけど、レイトさんでは習得できませんね』

『そうなのか。この調子で他のスキルを身に付けられるかな』

『それはレイトさん次第です。まあ、私も助言をしますから、いつでも頼ってくださいね』  
そのとき急に、レイトは疲れを感じる。

『ありがとう……そろそろ元に戻りたいんだけど』

『分かりました。それでは……』

アイリスの声が聞こえなくなり、灰色になっていた風景に色が戻る。

それと同時に、ゆりかごの上で固まっていた蝶が動きだした。

蝶が窓から出ていくのを見ていたレイトに、再び疲労感が押しかかる。そして瞼が重くなり、完全に眠りに落ちてしまった。

レイトが起きたときには、既に窓の外は闇に覆われていた。

彼は無性にお腹が空いていることに気付き、声を上げて母親に伝えようとする。

「あ、あうっ……ああああっ!!」

「あらあら!! 起きちゃったのかしら!？」

慌てた様子で母親が現れ、レイトを優しく抱き上げた。

(そういえば、未だにお母さんの名前を知らないんだよな。聞きたいけど話せないし……いつかアイリスに聞こう)

考えながらも、レイトは空腹のあまり本能的に彼女の豊満な胸に顔を埋めてしまった。

「うゝ……」

「ごめんなさいね。一人にさせて……お腹が空いちちゃったのかしら？」

「あぶうっ」

「はいはい。ほら、ゆっくり味わいなさい」

「あうっ……」

母親は恥ずかしげもなく胸元を晒し、彼に乳房を差し出した。

(そうか。赤ちゃんなんだから、お母さんのお乳が俺の食事になるんだよな……)

母親とはいえ、年若く美しい女性の胸を吸うことにためらいはあつたが、空腹には勝てなかった。

レイトは母親の胸に吸い付く。

「あむっ」

「うふふっ。可愛いわね。そんなに夢中で吸って……」

(恥ずかしい……)

見た目は赤子だが、レイトの精神年齢は15歳。高校一年生になったばかりの年頃である。

彼はこの状況に羞恥心を覚えていたものの、今は彼女の世話になるしかなく、結局、満腹になる

まで乳房を吸い続けるのだった。

### 3

レイトが異世界に転生してからおよそ一年が経過した。

スキルを覚えようと意気込んでいたレイトだったが、実は観察眼以外のスキルは習得できていない。赤子の状態なのでまともに動けず、新たなスキルの習得に挑戦するのは難しかったのである。

そんなわけで彼は、身体が成長するまで、この世界に順応していきながら大人しく過ごすことにしていた。

といっても、何もしていなかったわけではない。

ベッドで寝ながらアイリスと交信を繰り返し、この世界のことや屋敷の内部事情などを教えてもらっていたのだ。

交信は精神力を消耗するため、あまり長くやっているるとレイトは疲れて眠ってしまう。とはいえ、赤ん坊は寝るのが仕事のようなもので、誰からも不審に思われるようなことはなかった。

そんなある日、レイトがアイリスに母親の名前を聞くと、あっさりと答えてもらった。

『レイトさんのお母さんの名前は、アイラというんです。彼女は今の生活を受け入れ、十人ほどの使用人達と静かに暮らしているかと考えているようですね』

『考えているって……アイリスは人の心の中まで全部分かるの？』

『さすがにある程度だけですが、ざっくりとだったら把握することは難しくありません』

『すごいな……』

その後レイトは、母親のことについてさらに教えてもらった。彼女は現国王、つまりレイトの父親の正妻ではなかったらしい。

続いて、父親について尋ねてみる。

『俺の父親、バルトロス国王って、何人も奥さんを持てるほど偉いの？』

『そうですね。バルトロス王国は人族の治める唯一の国ですから、その国王はいわば、人族で一番偉い人物ということです。世継ぎを残すためにも、一夫多妻制を採ることは普通だと思います』

『なるほどね。ところで人族っていうわけだから、この世界には人間以外の種族もいるんだよね……』

レイトがそう質問すると、アイリスはすんなりと答えてくれる。

『はい、六種族が存在しています。レイトさん達のような人族、特徴的な尖った耳をした森人族、ずんぐりむっくりした見た目の小髭族、大きな体躯の巨人族、獣の性質を強く残している獣人族、様々な姿形を持っていますがいずれも知能の高い魔人族の六つです』

『へ〜。でもそんなに種族がいっぱいあったら、種族同士の喧嘩とか多そうだね』

『確かに、六種族には長年争っていた歴史があります。ですが、今から五十年ほど前、六種族は互いに領土の不可侵条約を結び、戦争を終結させたんです。それでも種族間の溝は完全に埋まったわけではありません。現在でも小規模な争いは起きています』

『でもさ、もし俺が不遇職じゃなかったら、人間の王様になれていたかもしれないってことなんだよね。そしたらもつと楽な生活が送れたのかな』

アイリスは少し間を置き、そしてゆっくりと告げる。

『まあ、不遇職でなくとも苦勞したと思います。国内には、現国王に不満を抱いている者も多いですし、法律を変えて先王の娘に王位を継がせようとする勢力も存在していますから。むしろレイトさんは、王城から追い出されたことで、より安全になったんじゃないでしょうか。継承権がなければ、レイトさんの命を狙う理由はありませんし』

『確かにそうかも。でも、どっちにしるスキルは覚えて、もつと強くなっておかないとね』

レイトが自らに言い聞かせるようにすると、アイリスは嬉しそうに言った。

『そうですね。この世界はただでさえ危険が多いですから。そろそろレイトさんも自力で動けるようになりますし、そうなったら、本格的な修業を始めていきましょか』



それから数日後、レイトは掴まり立ちができるようになった。

さつそくレイトは行動を開始する。

「んしょっ、んしょっ……」

『頑張ってください。まずは身体を動かすことから始めましょう』

アイリスに応援されながら、レイトは不慣れなハイハイで部屋にあった子供用の机まで移動する。これから習得しようとしているスキルの覚え方は、事前にアイリスから教わってあった。レイトは彼女に指示されていた通り、机の上に乗る。高さは50センチほどに過ぎないが、自力で立てるようになって間もないレイトにとってはかなりの高さである。

レイトは覚悟を決めると、床に向かって勢いよく飛び降りた。

「よつと……あうっ!？」

着地に失敗して倒れ込んでしまう。

レイトは痛みを我慢して身体を起こし、再び机の上に移動して、またもや床へ飛び降りた。

「てやあっ!!」

そんな奇妙な行動を何度も繰り返し、初めて両足で着地に成功した瞬間。

彼の視界に画面が表示された。

〈技能スキル「頑丈」を習得しました〉  
〈技能スキル「受身」を習得しました〉

レイトは安堵の息を吐いて床に倒れ込み、身体を横たえる。  
「はああああ」

そしてステータス画面を開く。

頑丈——肉体の耐久性を上昇させる

受身——肉体が受けた衝撃を外へ流す

新しく習得したスキルの説明を見て、レイトは笑みを浮かべた。

レイトは無意味に身体を痛めつけていたわけではない。これらのスキルを身に付けるために、何度も飛び降りていたのである。

スキル「頑丈」「受身」は本来なら格闘家が覚えるスキルだが、別の職業でも訓練で習得することが可能なのだ。

「ふう、いちゃいっ」

レイトは舌足らずな口調でそう言ったところ、微かに足音を感じ取った。

母親が向かってきていると思ったレイトは、慌てて窓の外を覗く。現在が夕方頃であることを確認してからカーテンを締め、ベッドの上によじ登った。そして、急いで毛布を被って寝たふりをする。

その数分後、部屋の扉が開かれ、母親のアイラが入ってくる。

「私の可愛い赤ちゃん!! お母さんが来たわよ……あら、お昼寝中かしら？」

「ぐ、ぐうぐうっ」

「ふふっ、可愛い寝顔。起こしたら可哀想ね。お食事はあとにしましょうか」

アイラはレイトが眠っていると信じてくれたらしい。それからアイラは、壁にかけられた蝋燭に目をやったものの、火を灯すことなく静かに退室していった。

アイラの足音が完全に聞こえなくなるまで待つてから、レイトは目を開ける。

「ごめんね、おかあたん」

アイラを上手く騙したレイトは舌足らずにそう言うと、部屋の中が完全な暗闇になるまで待ち続けるのだった。

完全に日が落ち、子供部屋は真っ暗になった。

レイトのいる子供部屋には窓が一つしか存在せず、天井に照明はない。壁際に設置されている蝋

燭が、部屋の中を照らす唯一の手段だ。

「……なにもみえないなあ。よいちよっ……あつ」

レイトはベッドから下りようとして、つまずいてしまった。そしてそのまま顔から落ち、床にぶつかってしまふ。

だが不思議なことに、痛みはごくわずかだった。

どうやら、昼間に習得した頑丈と受身のスキルのおかげらしい。

(スキルってちゃんと効果あるんだな)

それからレイトは、手探りで周囲の状況を確認していく。

「いてっ!? あうっ!? わあっ!?」

家具に衝突したり、足元に落ちていた玩具おもちゃを踏んで転んだりしたが、スキルの恩恵で肉体のダメージは最小限だった。

しばらくして夜目よめが利いてきたのか、次第に周囲の状況を把握できるようになる。

「よいちよっ……よいちよっ……ふうっ」

頑丈と受身のスキルを習得したときと違い、特に変な行動はせずに、レイトは寝転がったり、歩く練習をしたりした。

「ひまだなあ……あいうえお、かきくけこ……」

発音練習をしながら暗闇の中を歩き回る。

今回のスキルを得るためにアイリスからされていた助言は、『暗闇を恐れずに普段通りの行動を心掛ける』こと。ちなみにアイラが部屋に入ってきたときレイトが狸寝入りたぬまねいりをしたのは、彼女に蠟ろうそくを灯させないためだった。

やがてレイトは、暗闇の中でも完全に周囲を把握できるようになった。すると、彼の視界に画面が表示される。

〈技能スキル「暗視あんし」を習得しました〉

「よっちやあ」

新しくスキルを習得したことに、レイトは歓喜の声を上げた。目的を果たしたレイトは、さっそくステータス画面を開いて能力を確認する。

暗視——暗闇の中でも視界を確保できる

続いて、アイリスに声をかける。

『アイリス、無事にスキルを覚えられたよ』

『はい、ちゃんと見てましたよ。すごいじゃないですか』



『でも、スキルってこんなに簡単に覚えられるものなの？』

レイトはアイリスから褒められて嬉しかったものの、一日で三つもスキルが取ってしまったことを呆気なく思っていた。

アイリスが答えてくれる。

『それはレイトさんの年齢に関係しています。一般的には全然知られていないんですけど、実は、こちらの世界の人間が最もスキルを習得しやすいのは、誕生から幼年期くらいの時期なんです。あと、スキルの習得にも難易度があつて、今日覚えた頑丈、受身、暗視のスキルなんかは基本的なスキルとはいえ、小さい頃から訓練を積まないとなかなか覚えられないんですよ』

『そうなんだ。ところで、普通の人だとスキルは何個くらい覚えられるのかな？』

『環境によつて覚えられるスキルに違いがありますが、大抵の人は一生で十個くらいでしょうか。ですが、レイトさんは不遇職なのでそれからそれだけでは足りないでしょうね。なので、どんどん新しいスキルを覚えていきましょう。相性によつて覚えられないスキルも存在しますが、覚えられぬ数には制限はありません。とにかくたくさん覚えたほうが得ですよ』

アイリスの声は、なぜか楽しそうだった。

『得つて、なんか軽いな……まあいいや。じゃあ、これからもアイリスには色々教えてもらうよ』

『任せてください』

アイリスとの交信を終え、レイトは考える。

(アイリスのおかげで一日に三つもスキルを手に入れられた。アイリスの指示に従つて今から修業を続けていけば、不遇職でもきつと強くなれるはず！)

なんだかやる気になつてきたレイトは思わず声を上げる。

『よし、このちよーしでがんばるぞおっ!!』

誰もいない部屋で、気合を入れたレイトの声が響き渡るのだった。

## 4

レイトが異世界に転生してから二年が経過した。2歳となった彼は、訓練のおかげで歩けるようになった。

頻繁に屋敷の中を歩き回つてしまうため、使用人達をたびたび困らせてさえている。

使用人達は、普通の子供よりも活発で危なっかしいレイトを心配して追いかけて回し、毎日のように、使用人とレイトの鬼ごっこが繰り返された。

今日ももちろん鬼ごっこは行われており、使用人の勝利で終わろうとしていた。屋敷の一角にある書庫へ近付こうとしたレイトの首根っこを、一人のメイドが掴む。

## 立ち読みサンプル はここまで

「坊ちゃま!! その廊下は掃除前なので近付いてはいけません!!」

「やあっ!! 離して〜!!」

「わがままを言わないでください!! もう……どうしてそんなに書庫に入ろうとするのですか。文字もまだ読めないのに!」

「読めるよおっ」

「はいはい。ほら、子供部屋で大人しくしててください」

この一年の間に、レイトは言葉をだいぶ発音できるようになっていた。レイトは抗議の声を上げたのだが、メイドは彼の言葉を聞き流して、彼を子供部屋に戻す。

そこまでは良かったのだが、メイドは絵本が散らかっている子供部屋を見て、深いため息を吐いた。

彼女の名前はアリア。森人族の女性であり、森人族の特徴通り金髪碧眼で両耳が細長く尖っている。年齢は20代後半だが、その見た目は年齢以上に若々しく、レイトにとっては姉のような存在だった。

アリアが困ったように言う。

「もう、お坊ちゃま、散らかしたらちゃんと片付けてください。まったく……」

「ごめんなさーい」

「こういうところだけはお母様と似て……あ、こら!! 勝手に部屋から抜け出そうとしない!!」

「あうっ……」

アリアが絵本を整理している隙に、部屋を出ようとしていたレイト。しかし、アリアに簡単に捕まってしまう。

レイトは悪びれもせず、代わりのお願いをする。

「ねえねえ。だったら魔法を教えてよ、アリア〜」

「またですか、坊ちゃま。前にも言ったように、坊ちゃまに魔法は早いです。それに、支援魔術師の魔法は私も扱えませんから」

「見せてくれるだけでいいから〜」

「だ・め・です!! ほら、ちゃんとお片付けしましょうね」

「ぶう〜」

「くすっ。もう、子豚さんみたいですよ」

レイトは年齢相応の子供のように、甘えた仕草をしてみせた。アリアはそんな彼を見て笑みを浮かべながらも、絵本の片付けに取りかかるのだった。

ちなみに、この世界で魔法を扱えるのは、魔術師系の職業の者だけである。森人族は主職か副職がほぼ魔術師系統の職業になるため、森人族であれば魔法を使えると考えて間違いない。実際にアリアの主職は精霊魔術師なので魔法は扱えるのだが、レイトは彼女が魔法を使っているのを見たことがなかった。